

75. 会津藩家老山川家の明治期以降の足跡に関する研究

昭和女子大学 人間文化学部歴史文化学科 非常勤講師 遠藤 由紀子

概要

本研究は、幕末に会津藩家老であった山川家が近代以降をどのように生きていったかを調査している。山川家の7人の兄弟姉妹（二葉、浩、ミワ、操、健次郎、常盤、捨松）は近代教育、女子教育、皇室、社会福祉に各人が貢献しており、彼らが近代国家形成期に貢献した足跡について、本助成の初年（2022年）に書籍（『会津藩家老・山川家の近代－大山捨松とその姉妹たち－』）として出版した。その後、兄弟姉妹の次世代の足跡を記録するため、ご子孫から提供された史料分析（オーラルヒストリー含）や現地調査（会津・関東近郊・北九州・行橋・長崎・佐世保・青森・函館等）を進めた。その過程で、助成の最終年は『きょうだいの日本史』（共著、吉川弘文館、2024年8月刊）、千代田区男女共同参画センターの広報誌（MIW56号、2024年12月取材依頼、2025年3月刊）などで研究内容を発表する機会に恵まれた。また、研究内容について公益財団法人白河法人会や棚倉町などで一般向けに講演する機会もあった。助成は本年度で終了するが、コロナ禍により現地調査が進まない時期に助成期間を延長して下さり、大変有難かった。来年度以降に助成による調査で得た知見、成果について、論文にまとめる予定である。幕臣をはじめ、会津藩などの佐幕派たちが近代国家の形成（特に教育面）に大いに貢献していたこと、それらの子孫たちも高度経済成長期を支えていたこと（例えば、東京オリンピックを成功に導いた安川第五郎や梶井剛、東龍太郎は会津の地縁があったことなど）、それらを具体的に明らかにするという、本研究を新たなステージへと導いてくださった三菱財団に多大な感謝を申し上げる。

背景および目的

幕末の会津藩家老であった山川家の7人の兄弟姉妹について、これまで長男浩・次男健次郎・五女捨松についての研究はいくつかあったが、7人兄弟姉妹の全体像と明治期の生活を知る研究はなかった。筆者はこれまで（研究助成採択前）、長女二葉、次女ミワ、五女捨松、次男健次郎妻柳、長男洵、洵の妻良に関する研究を論文にまとめていた。山川家の各人物の子孫の方より提供された新出史料と聞き取りを基にしており、これまで明らかにされていなかった貴重な記録であった。研究目的として、他の未調査の人物の研究を進めながら、これらをまとめて書籍化し、後世に残すこと、さらに、これまでの研究過程で山川家の子孫の方より譲渡された、次女ミワの四男櫻井懋（つとむ）による回顧録「吾が家の記録と吾がたどった道」（1968年）を分析することを目的とした。懋は北海道根室生まれである。櫻井家は根室の屯田兵として入植しており、明治20年（1887）に当地で生まれた。北海道師範学校卒業後、北海道の各小学校教師を経て、一念発起し上京した。大正5年（1916）、叔父である山川健次郎の世話で明治紡績合資会社（福岡県戸畑市）に就職し、福岡に移住した。大正7年（1918）に飯沼檀（会津藩士飯沼関弥娘、関弥は明治期の会津松平家の家令を勤めていた、また白虎隊の自刃部隊で唯一生き残った飯沼貞吉兄である）と結婚、2女に恵まれた。明治紡績合資会社は、福岡の安川財閥（社長安川敬一郎、松本健次郎）の子会社である。近代日本の福岡には地方財閥が4つ（安川財閥、貝島財閥、麻生財閥、石橋財閥）あり、石橋財閥以外は炭礦を生業としていた。安川敬一郎は、山川健次郎と共に九州工業大学を創立している。懋もまた安川財閥と関係しながら、福岡で20年以上過ごした。子どもの進学のため、再び上京すると、山川健次郎の長男洵の妻良の兄にあたる梶井剛（逓信省、電電公社総裁、日本電気（NEC）社長）と懇意とな

る。梶井剛は安川第五郎（東京オリンピック組織委員長）と同期、オリンピック開催時は健次郎三女照子の夫東龍太郎（医師）が都知事であった。懋は、東京に住む山川家、旧会津藩士の人々を繋ぐ役割を果たしていく。このような、これまで公的な記録として現れていなかった櫻井懋に関する史料を探ることで、その周辺の間人関係を明らかにし、後世に伝えたい人間の生き方を明らかにする研究・調査を目的とした。九州工業大学に関する資料調査、安川財閥に関する史跡訪問をはじめ、現地の古書店の調査、関係人物への聞き取りなどのフィールドワークを実施した。これらの研究目的を果たし、発表することで、会津をはじめ、北海道、福岡、その他各方面に生きる人々の英知となり、生きる希望になって欲しいと思っている。

これまでの成果

「会津藩家老山川家の明治期以降の足跡に関する研究」の研究助成中（2022年2月～2025年1月）にご子孫から提供された史料分析（オーラルヒストリー含）や現地調査（会津・関東近郊・北九州・行橋・長崎・佐世保・青森・函館等）を進めた結果、山川家に関する研究が進んだ。研究助成期間の成果（出版、論文、学会発表・講演会、メディア掲載など）を以下に報告する。多くの方に研究成果を知って頂く機会となり、助成に感謝している。

【出版】

- ①単著『会津藩家老山川家の近代－大山捨松とその姉妹たち』（2022年5月刊、雄山閣）
→第15回女性文化研究奨励賞（坂東眞理子基金）受賞
- ②共著『信州から考える世界史－歩いて、見て、感じる歴史－』（2023年7月刊、えにし書房）
→担当箇所：「高遠藩主保科正之、山形、そして会津へ－戊辰戦争に至る遠因」「近代日本と世界につながる信州の女性たち」「信州の歴史と女性」「信州の製糸産業と女性」64～67頁、126～136頁。
- ③共著『きょうだいの日本史』（吉川弘文館、2024年8月刊）
→担当箇所：「旧会津藩家老山川家のきょうだい」198～210頁

【論文】

- ④「会津藩家老山川家のきょうだい」『日本歴史』896号、吉川弘文館（2023年1月）

【学会発表・講演会】

- ⑤第306回幕末史研究会「会津藩家老・山川家と明治期の女子教育－山川二葉、（山川操）、大山捨松などの足跡」（於：新宿歴史博物館、2022年10月22日）
- ⑥第4回新島八重顕彰祭（新島八重顕彰会主催）講演会講師、「明治期の女子教育と会津藩－新島八重・山川二葉・大山捨松など－」（於：会津若松市大龍寺）2023年6月14日→翌日、講演会に関する記事が福島民報に掲載
- ⑦第15回女性文化研究奨励賞（坂東眞理子基金）受賞記念、第177回女性文化研究所 研究会（一般公開講演会「『会津藩家老・山川家の近代－大山捨松とその姉妹たち－』から学ぶこと－今を生きる私たちへのメッセージ」講演（於：昭和女子大学8号館・コスモスホール）2023年7月28日
- ⑧公益社団法人白河法人会・第12回通常総会・公開講演会「白河周辺に魅了された明治人たち－渋沢栄一、山川浩、稲垣千穎、田山花袋など－」講演（於：グランドエクシブ那須白河）、2024年6月24日

【その他】

- ⑨『会津藩家老・山川家の近代』出版に関して、和歌山県御坊市長（三浦源吾氏）へ表敬オンライン訪問、書籍贈呈式（紀州新聞に掲載）2022年6月
- ⑩福島民報・文化欄「新刊時評」『会津藩家老・山川家の近代』の書評「現代に通じる生き方」が掲載、2022年7月
- ⑪福島民友・1面コラム「編集日記」にて「眼界を広く持つ」として、「自分らしく生きれる社会をつくるのに、視野を広げるべき」と引用、2023年6月

⑫会津会（町野英明会長）『会津会会報』第129号「和歌山県御坊と会津のつながり－山川浩、紀州落ちのその後で－」寄稿、2023年7月

⑬北國新聞コラム「北國抄」（坂東眞理子著）に「生き残った者の責任」として、拙著『会津藩家老・山川家の近代』の内容が紹介、2023年8月

⑭千代田区男女共同参画センター MIW 情報誌「MIW 通信」第56号（2025年3月発刊「明治の女子教育－千代田区から始まった女性の学び」大山捨松、津田梅子について取材協力、2024年12月

結果および考察

会津藩家老山川家の明治期以降の足跡に関する研究について、助成を頂き、研究が大いに進展した。助成は本年で終了するが、コロナ禍により現地調査が進まない時期に助成期間を延長して下さり、大変有難かった。助成の採択前から、山川家のご子孫の方に10年以上をかけて史料を拝借したり、オーラルヒストリーを行ってきたが、助成により1冊にまとめられたこと、その1冊がまだお話を伺ったことのない、山川家のご子孫の方にもネットワークが広がる機会となり、さらに聞き取り調査が進んだ。なかには90代の方にも数人お会いでき、御話を伺うことが出来、貴重な話を記録している。来年度以降に助成による調査で得た知見、成果について、追加で論文もしくは書籍としてまとめる予定である。幕臣をはじめ、会津藩などの佐幕派たちが近代国家の形成（特に教育面）に大いに貢献していたこと、それらの子孫たちも高度経済成長期を支えていたこと（例えば、東京オリンピックを成功に導いた安川第五郎や梶井剛、東龍太郎は会津の地縁があったことなど）、それらを具体的に明らかにするという、本研究を新たなステージへと導いてくださった三菱財団に多大な感謝を申し上げる。

（完）

発表論文

- 1) 単著『会津藩家老山川家の近代－大山捨松とその姉妹たち』（2022年5月刊、雄山閣）
- 2) 単著「会津藩家老山川家のきょうだい」『日本歴史』896号、吉川弘文館（2023年1月）
- 3) 共著『信州から考える世界史－歩いて、見て、感じる歴史－』（2023年7月刊、えにし書房）→担当箇所：「高遠藩主保科正之、山形、そして会津へ－戊辰戦争に至る遠因」「近代日本と世界につながる信州の女性たち」「信州の歴史と女性」「信州の製糸産業と女性」64～67頁、126～136頁。
- 4) 共著『きょうだいの日本史』（吉川弘文館、2024年8月）→担当箇所：「旧会津藩家老山川家のきょうだい」198～210頁